

## 臨死患者のことば

—意味の分析と支援のあり方をめぐって—

若林理恵子, 澤田愛子

富山医科薬科大学医学部看護学科

### 要 旨

看護師と家族が聞いた「臨死患者のことば」の主なものを明らかにし、その内容を分析するために、インタビュー調査を行った。インタビュー内容をnarrative researchの手法で分析した結果、看護師が聞いた「臨死患者のことば」の内容は、【間近に迫った死の意識】【あきらめ】【人生の振り返り】【家族関係への後悔】【家族を遺す不安】【感謝】【心身の苦痛】【死の迎え方の希望】【死後の世界】【墓参りへの希望】【神への祈り】の11のカテゴリーに分類できた。また、家族が聞いた「臨死患者のことば」の内容は、【家族を遺す不安】【配偶者への愛】【感謝】【家族への励まし】【心身の苦痛】【あきらめ】【怒り】【死後の世界】【自然との触れ合い】の9のカテゴリーに分類できた。

本研究より、「臨死患者のことば」には、重要なメッセージや要望が内包されていることが明らかになった。看護支援として、看護師は「臨死患者のことば」の重要性を深く認識し、家族へも患者の「ことば」に傾注するように指導する必要がある。そして、看護師と家族が患者の「ことば」を共有し、「ことば」に具体的な要望が含まれている場合は、両者が協力して患者の要望をできる限り満たすことが重要である。

### キーワード

臨死患者のことば, メッセージの重要性, 意味の分析, カテゴリー, 支援

### 序

1980年代より日本国内では終末期医療が注目され始め<sup>1)</sup>、現在、終末期の看護についても様々な研究がされており、この種の研究会も一層広がりを見せている。今わが国では「終末期医療ブーム」と言えるほど、この問題への関心は高い。しかし、終末期の、ことに臨死患者の「ことば」に焦点を当てた研究はこれまでわが国にはほとんど存在せず、臨死患者の「ことば」が医療スタッフから注目されてきたとは言い難い。

稀少な臨死患者の「ことば」の研究の一つに、キャラナン (M. Callanan) とケリー (P. Kelley)

の研究がある。看護師である彼女等は200人以上の臨死患者のことばを分析した<sup>2)</sup>。その結果、周りの人に自分の死が近いことを知らせたり、「会いたい人がいる」とやり残したことを訴える等、臨死患者のことばには、重要な意味が込められていることが明らかになった。このように、数少ない研究では、臨死患者の「ことば」の分析が行われ、彼(女)等のことばがもつ意味とその重要性についてある程度明らかにされている。その他には臨死患者のことばを詳細に分析した研究は見当たらない。

死を目前にした臨死患者の思いは、我々の想像

を越えるものがあると思われるが、その患者の思いを知る重要な手がかりは、患者の「こば」であるとする。看護師等が臨死患者の放つこばに注意深く聴き入り、そのこばの意味を理解できたなら、患者は安堵しながら死に向かっていくことができるのではないだろうか。こういう意味で、終末期医療の中で、これまで見のがされがちであったこの問題に焦点を当てていくことは、今後の臨死患者への援助やケアをより充実させていくためにも必要不可欠な事柄であると思われる。

そこで本論文では、この問題に焦点を当てて論を展開してみることにした。ターミナル期の中でも、1ヵ月以内に死が迫っている臨死患者を対象として、看護師と家族の両者へのインタビューから「臨死患者のこば」を拾い集め、そのこばの内容を分析し、さらに今後の終末期医療への提言を試みたい。

### 用語の定義

本論文において用いる鍵となる用語をあらかじめ定義しておきたい。

臨死患者：末期患者とは一般的に生命予後がおおよそ6ヵ月以内の患者を指すことが多いが、本論文では、臨死患者と末期患者を区別し、臨死患者とは生命予後が1ヵ月以内の、死がごく間近に迫った患者を意味することとした。

また、本稿においては、「家族」と「遺族」を使い分けた。患者の存命中の出来事に関連の中では「家族」を用い、死別後に関連した事柄の中では「遺族」を用いた。

### 研究方法

#### 1. 研究対象

1) 看護師の臨床経験年数が3年以上の、臨死患者を看護した経験のある者で、富山県内の2ヶ所の総合病院に勤務する看護師7名(表1)。

2) 3年以内に身内を亡くした遺族で、ごく親しい関係にあった人(配偶者、子供等)6名(表2)。

#### 2. 調査期間

2002年8月5日から10月3日まで

表1 対象者(看護師)の概要(n=7)

項目	内容	人数(名)
性別	女性	7
年齢	30代	2
	40代	4
	50代	1
平均42.3歳		
経験年数	15年以上20年未満	2
	20年以上25年未満	2
	25年以上	3

表2 対象者(遺族)の概要(n=6)

項目	内容	人数(名)
性別	男性	2
	女性	4
年齢	30代	1
	40代	0
	50代	2
	60代	2
	70代	1
平均56.5歳		
患者との関係	配偶者	4
	子供	2
死別からの経過年数	1年未満	1
	1年以上2年未満	2
	2年以上3年未満	3

### 3. 調査方法

次に示す質問項目に基づいて、半構成的面接法により調査を行ったが、対象者にはそれ以外にも自由に語ってもらうことにした。

看護師と遺族への質問内容は、主として、「臨死患者のこばで印象的なもの、もしくは重要だと思ったこばについて」、「そのこばを発した時の患者の様子や患者の病状」、「患者の性別、年齢、病名告知の有無等の基本情報」、「そのこばを聞いた時、あなたはどのように感じ、どのように対応したか」等々であった。

### 4. 分析方法

分析は、narrative researchの一分析方法である「内容のカテゴリカル分析」(categorical content analysis)に基づいて行った。なお分析に際しては、A. Lieblichらの方法<sup>3)</sup>を参照した。

#### 分析の手順

1) 録音テープを基に逐語記録を作成し、それを何度も読み返した。

2) 逐語記録から、臨死患者の**ことば**を含む語句を抽出し、コード化した。

3) 各コードを比較検討し、類似したコードを分類して抽象化し、カテゴリーを抽出した。

4) 抽出したカテゴリーから、カテゴリーが内包する意味を考察して理論化した。

5) 信頼性を得るために、全課程において質的研究者のスーパービジョンを受けた。

## 5. 倫理的配慮

対象者への研究協力の依頼に際しては、研究目的を記載した用紙を渡し、口頭でも説明を行った。その際、研究に協力できなくても、何の不利益も生じないことを十分に説明し、同意の得られた場合のみ調査を実施した。

さらに、テープの録音については、対象者の承諾を得てから行った。対象者にはインタビューから得られたデータは本研究のみに使用し、個人が特定できない形で公表する場合のあることも説明し、了解を得た。

## 結 果

インタビューの結果から、臨死患者の「ことば」に焦点を当てて整理した結果を以下に述べたい。本稿では紙数の制限から、「ことば」を聞いた後の看護師と家族の対応の部分は一部割愛した。

### 1. 看護師が聞いた「臨死患者のことば」

看護師へのインタビューから、臨死患者が放ったことばで、特に彼女達が印象に残っているとしたことばを抽出したところ、その内容は、【間近に迫った死の意識】【あきらめ】【人生の振り返り】【家族関係への後悔】【家族を遺す不安】【感謝】【心身の苦痛】【死の迎え方の希望】【死後の世界】【墓参りへの希望】【神への祈り】の11のカテゴリーに分類できた(表3)。以下、

【】内はカテゴリーを表す。患者のことばで、カテゴリーに関連することばは、太文字で「」内に示すことにする。なお、( )内は意味を明確にするために、研究者の方で補ったことばである。

以下、それぞれのカテゴリーに含まれる患者の主なことばの内容を(表4)、患者の背景や状況と共に簡略に紹介したい。(なお、患者の背景に

表3

看護師と家族が聞いた「臨死患者のことば」の内容に関するカテゴリー

看護師	家 族
カテゴリー	カテゴリー
間近に迫った死の意識	家族を遺す不安
あきらめ	配偶者への愛
人生の振り返り	感謝
家族関係への後悔	家族への励まし
家族を遺す不安	心身の苦痛
感謝	あきらめ
心身の苦痛	怒り
死の迎え方の希望	死後の世界
死後の世界	自然との触れ合い
墓参りへの希望	
神への祈り	

ついては、インタビュー対象者の記憶が薄れている部分もあり、必ずしも必要な情報が全て聴取できているわけではない)

### 1) 【間近に迫った死の意識】

患者達は、自分の死が近いことを感じ、看護師にその思いを伝えていた。

ある悪性リンパ腫の男性は、以前は治療に対して積極的な姿勢を見せる患者であったが、病状が悪化してからは、「頑張る」とは言わなくなった。死の数時間前、患者は看護師に向かって、「もう俺、死んでしまうんか」と言った。

また、膀胱癌の79歳の男性は、骨転移による疼痛が強く退院は延期となり、ある日看護師に、「もう家には帰れんがじゃないかのう。これで終わりじゃないかのう」と一言つぶやいた。

会社を経営していた肝癌の57歳の男性は、仕事の引継ぎを終え、「完全燃焼した」と看護師に話していたこともあった。死の数日前、「もう自分は月単位ではなくて、日単位なんだな」とさみしそうに看護師につぶやいたという。

ある甲状腺癌の51歳の女性はキリスト教徒であり、以前から、「死ぬこと自体は恐くない」と話していた。軽い呼吸困難がみられるようになったある日、看護師に対して、「**だけど私、最期はどうなるの**」と、死までの過程でどれだけ苦しい思いをするのかと疑問を投げかけた。看護師は鎮痛剤や鎮静剤を使用すれば、苦しみを和らげることができるかと患者に説明した。

表4 各カテゴリーに含まれる看護師が聞いた臨死患者の主なこぼれ話

カテゴリー	臨死患者のこぼれ話
間近に迫った死の意識	「もう俺、死んでしまうんか」 「もう家には帰れんがじゃないかのう、これで終わりじゃないかのう」 「もう自分は月単位ではなくて、日単位なんだな」 「だけど私、最期はどうなるの」
あきらめ	「今度はもうだめだ」 「頑張ってきたけど、もうこれで俺あかんわ」
人生の振り返り	「娘を産んでおいてよかったわ」 「お袋を二人もって、俺は幸せ者だったんだ」 「昔、山の学校で教師をしていたんです」
家族関係への後悔	「妻に会いたい、このままでは死ねない」 「自分が悪いことしてきたから、娘から介護なんてしてもらえない、わかっているんだけど（和解したい）」 「娘には申し訳ないことをした」
家族を遺す不安	「お父さんも娘も心配」 「誰かいい人（息子の再婚相手）いないかな」 「娘達はちゃんとやっていけるのだろうか」
感謝	「病いしてしみじみ感じる家族愛」 「いろいろお世話になってありがとう」 「ありがとうね、長い間世話になったね」
心身の苦痛	「こんなに痛いのなら、他の世界に行きたい」 「生きていても苦しいだけなら、早く死なせてくれ」 「死にたくない、この痛みをとってほしい」
死の迎え方の希望	「意識がなくなってもいいから、眠らせてほしい」 「これで心残りはないから、眠らせてほしい」
死後の世界	「死んだら一体どこへ行くんだろう」
墓参りへの希望	「（先祖の）墓参りに行かんらん」 「妻の墓参りに行きたい」
神への祈り	「静かにそこにいけるように、みんなで祈ってほしい、看護婦さんにも祈ってほしい」

## 2) 【あきらめ】

このカテゴリーには、以下の患者のこぼれ話が含まれていた。

白血病の72歳の男性は、以前は治療に対して積極的な姿勢を看護師に見せていたが、死の1週間前から、「今度はもうだめだ」と看護師に何度も言うようになった。

また、ある男性は、死の数日前に、「頑張ってきたけど、もうこれで俺あかんわ」と言った。看護師は「あかんかね」と患者のこぼれ話をそのまま繰り返すと、「うん、もうだいぶん辛くなってきたもん」と患者は答えた。

## 3) 【人生の振り返り】

死が間近に迫っている患者達は、人生を振り返り、自分の人生を肯定的に捉えようとしていた。

胃癌の70歳の女性は、3人の娘達が毎日見舞いに来てくれることに感謝し、死の1週間前には、「娘を産んでおいてよかったわ」と言い、かつて、跡取り息子を産めなかったことを姑に責められ、悩

んだことを看護師に話した。

また、下咽頭癌の40代の男性は、産みの母と育ての母の2人の母親をもち、複雑な家族関係に悩んだことがあった。しかし、死の1週間前には、「お袋を二人もって、俺は幸せ者だったんだ」と言い、自分の生い立ちと母親達への思いを看護師に語った。

膀胱癌の59歳の男性は、疼痛のために終日ベッド上での生活を強いられていた。ある日患者は、看護師と山の雪を見ていた時、「昔、山の学校で教師をしていたんです」と教員をしていた頃の話をつづらした。

## 4) 【家族関係への後悔】

患者達は看護師に家族に対する後悔の気持ちを語っていた。看護師は皆、時間をかけて患者の話を聞き、家族関係の修復に向けて家族に働きかけていた。

肺癌の62歳の男性は妻との関係が悪く、死の数日前になって、「妻に会いたい。このままでは死

ねない」と、どうしても妻に謝りたいと看護師に言った。そこで看護師は妻に来院するように説得し、最終的には夫婦はお互いに謝ることができた。

子宮癌の80歳の女性は、「自分が悪いことしてきたから、娘から介護なんてしてもらえない。わかっているんだけど（和解したい）」と看護師に言い、昔を振り返り、自分の勝手に娘の面倒をみてこなかったことを後悔していた。看護師は娘に連絡を取った結果、娘は最初は拒否していたが、頻繁に面会に訪れるようになった。

乳癌の50歳の女性は、離婚をきっかけに娘とは疎遠となっていたが、患者が入院してからは、娘は患者の付き添いをするようになった。しかし今までのわだかまりがあり、娘は患者と口をきこうとせず、患者はその娘の態度に心を痛めていた。死の2週間前に、患者は看護師に、「娘には申し訳ないことをした」と打ち明けた。そこで看護師は、患者の気持ちを娘に伝える等、親子関係に介入した結果、患者と娘は素直に会話ができるようになった。

#### 5) 【家族を遺す不安】

患者達は家族を遺して死ぬ不安を、看護師に訴えていた。

子宮癌の82歳の女性には娘が5人いたが、精神疾患をもっていたり、離婚したばかりであったり、全ての娘がそれぞれ問題をもっていた。夫は痴呆症で施設に入所していた。患者は死の数週間前から、「お父さんも娘も心配」と看護師に家族に関する心配な気持ちを何度も打ち明けていた。看護師は娘達に患者の思いを伝え、その後娘達は、心配しないようにと患者に声を掛けたという。

口腔癌の60歳の女性のケースでは、患者の息子は離婚しており、息子の子供の世話は患者がみていたため、死の1ヶ月前、「誰かいい人（息子の再婚相手）いないかな」と息子の生活についての不安を看護師に話した。看護師は患者の話をよく聞いた。

胃癌の70代の女性は、死の1週間前に、「娘達はちゃんとやっていけるのだろうか」と娘達への思いを切々と看護師に語った。看護師は患者の話をよく聞いた。

#### 6) 【感謝】

これらのことばには、家族と看護師に対する患者の感謝の気持ちが込められていた。

ある男性患者は、病気になって家族のありがたさがわかったと看護師に話し、「病いしてしみじみ感じる家族愛」と俳句をつくり、看護師に聞かせた。

子宮癌の82歳の女性は、死の数時間前、受け持ち看護師の帰宅の前に、「いろいろお世話になってありがとう」と感謝の気持ちを述べた。

また、以前は看護師に怒りをぶつけてばかりいた男性患者が、死の数日前には看護師に、「ありがとうね。長い間世話になったね」と言った。

#### 7) 【心身の苦痛】

これらのことばには、専門職としての看護師に、苦痛をとってほしいという患者の切実な思いが込められていた。

食道癌の51歳の男性は、骨転移のため、強い疼痛に長期間にわたり苦しんでいた。死の数週間前、患者は看護師に、「こんなに痛いのなら、他の世界に行きたい」と訴えた。看護師は医師に報告し鎮痛剤を増量したが、その効果はほとんどなかった。

また、80歳の男性には強い呼吸苦があり、死の数日前に、「生きていても苦しいだけなら、早く死なせてくれ」と看護師に訴えた。看護師は鎮静剤の使用について患者に確認してみた。患者は死の瞬間まで意識を保つことを望み、鎮静剤の投与を拒否した。

子宮癌の82歳の女性は、以前は「寿命だから死ぬのは仕方がない」と看護師に話していた。しかし疼痛が徐々に増強し、死の1週間前に看護師に対して、「死にたくない、この痛みをとってほしい」と訴えた。看護師は患者の訴えをよく聞いた後、疼痛を医師に報告し鎮痛剤を増量した。

#### 8) 【死の迎え方の希望】

死の迎え方について口にする患者もいた。

肺癌の60歳の女性は、自分の父親が苦しんで死んだという強烈な印象をもっていた。そこで、「意識がなくなってもいいから、眠らせてほしい」と言い、眠りながら死を迎えたいと何度も看護師に頼んだ。看護師は鎮痛剤や鎮静剤を使えば苦し

みを緩和できることを患者に伝えた。

肺癌の62歳の男性は、死の数日前に、妻に謝り和解した後に、「これで心残りはないから、眠らせてほしい」と鎮静剤の使用を看護師に頼んだ。そのこぼれを聞いた看護師は、医師に連絡をとり患者に鎮静剤の投与を行ったという（インタビューでは鎮静剤の薬物名や投与量は明らかにされなかった）。

### 9) 【死後の世界】

死後の世界について話す患者もいた。

胃癌の60代の男性は、病気になってから仏教の本をよく読んでいた。ある日患者は看護師に、「死んだら一体どこへ行くんだろう」とつぶやいた。

### 10) 【墓参りへの希望】

2人の患者は死を間近にして、看護師に墓参りに行きたいと訴えていた。

胃癌の80代の男性は、死の数日前になって、「（先祖の）墓参りに行かんらん」と墓参りを強く希望した。看護師は墓参りの準備をしたが、患者が急変し死亡したため実現しなかった。

肝癌の80歳の男性は、妻を亡くした直後に入院し、妻のことを思い出しては涙を流していた。体調が悪いにも関わらず落ち着かない様子で、「妻の墓参りに行きたい」と何度も看護師にせがんだ。

看護師は家族と調整を行い、墓参りが実現した。

### 11) 【神への祈り】

病室でミサを希望する患者もみられた。

肺癌の51歳の女性はキリスト教徒で、死ぬこと自体は恐れないが、死を迎えるまでの過程に対して不安をもっていると看護師に話していた。そして、「静かにそこにいけるように、みんなで祈ってほしい。看護婦さんにも祈ってほしい」と最期にはミサを立ててほしいと希望した。そこで、看護師は患者の希望を夫に伝え、夫は神父を呼び、病室でミサを行った。

### 3. 家族が聞いた「臨死患者のこぼれ」

遺族へのインタビューから、遺族が患者のこぼれで、印象に残っているとしたことばを抽出したところ、その内容は、【家族を遺す不安】【配偶者への愛】【感謝】【家族への励まし】【心身の苦痛】【あきらめ】【怒り】【死後の世界】【自然との触れ合い】の9のカテゴリーに分類できた（表3）。

看護師が聞いた臨死患者のこぼれと同様に、それぞれのカテゴリーに含まれる患者の主なことば（表5）を、患者の状況や背景と共に紹介する（この場合も家族の記憶の問題から、必ずしも必要な情報が全て聴取できているわけではない）。

表5 各カテゴリーに含まれる家族が聞いた臨死患者の主なことば

カテゴリー	臨死患者のことば
家族を遺す不安	「私が死んだら（夫が）一人になるんで、それが心配で、死ぬにも死にきれない」 「（息子達が）ちゃんとうまくやっていけるかな」 「この子（娘）、兄弟おらんから、あんたさん兄弟になってくだはれ」
配偶者への愛	「モナリザの微笑ってあんたのためにあるんだ」 「私が死んだら、棺の中に二人で撮った写真を入れてもらえればいい。後は何もいらない」
感謝	「わがままな一生送らせてもらって、ありがとう」 「出会えてよかった、ありがとう」
家族への励まし	「あんた、俺がいなくなっても大丈夫だわ」 「Ｙ子（娘）は、離婚してもいいじゃないか。お前（妻）と一緒に二人で暮らせればいいよ」 「死んでも（あなたを）見ているから、大丈夫」
心身の苦痛	「ベッドを上げて」、「ベッドを下げて」 「私の体がだんだんだんだん壊れていく」 「泊まって、泊まって」 「寝かしてえ」、「起こしてえ」、「横になりたい」
あきらめ	「私、死にたい」 「頑張れ頑張れ言うてものう、おらにも限界があるわ」
怒り	「俺はこういう病気になったのに、お前はしゃあしゃあとしている」
死後の世界	「おら悪人やから、地獄に行かんらんわ」
自然との触れ合い	「今日の朝日きれいだったね」、「夕日きれいだったね」、「月きれいだったね」

### 1) 【家族を遺す不安】

患者は家族を遺す不安な気持ちを、患者が心配している当人には直接伝えずに、他の人に伝えていた。

子宮癌と卵巣癌の67歳の女性は、夫と2人暮らしであったため、「私が死んだら（夫が）一人になるんで、それが心配で、死ぬにも死にきれない」と息子の妻に話した。

大腸癌の49歳の女性には20代の2人の息子がおり、それぞれが結婚をし、新しい生活を始めたばかりであった。患者は「（息子達が）ちゃんとうまくやっていけるかな」と夫に言い、息子達の将来を心配していた。

胆嚢癌の80歳の女性は、病弱なひとり娘を遺して死ぬことを心配し、娘の友人に、「この子（娘）、兄弟おらんから、あんたさん兄弟になってくだされ」と言った。

### 2) 【配偶者への愛】

2人の患者は日頃から率直に感情を伝え合う夫婦ではなかったが、死を間近にして、配偶者へ愛のことばを送っていた。

大腸癌の60歳の男性は、脳転移のため普段は話すことが少なかったが、死の1週間前に、力を振り絞って、「モナリザの微笑ってあんたのためにあるんだ」と言った。妻は喜び、「もう一度言って」とユーモアを交えながら答えると、患者は笑ったという。

子宮癌で卵巣癌の67歳の女性は、死の1ヶ月前に夫に対して、「私が死んだら、棺の中に二人で撮った写真を入れてもらえばいい。後は何もいらない」と穏やかに言った。死の近いことを直接告げるそのことばに、夫は困惑して沈黙した。

### 3) 【感謝】

患者達は家族に感謝のことばも告げていた。

胃癌の65歳の男性の妻は、患者のわがままに苦労してきたが、患者は死の数日前に、「わがままな一生送らせてもらって、ありがとう」と初めて妻に感謝の気持ちを伝えた。妻はそのことばに感動し、今までの苦労が報われたと感じた。

大腸癌の49歳の女性が息子に宛てた手紙の中には、「出会えてよかった、ありがとう」と息子が生まれてきてくれたことに対する患者の思いが綴

られていた。患者の死後に息子はこの手紙を読み、生きる力になると感じた。

### 4) 【家族への励まし】

死を間近に感じた患者達は、愛する家族に励ましのことばを送る場合もあった。

大腸癌の60歳の男性とその妻は、かねてから娘の離婚問題に頭を悩ませていたが、死の2日前には、患者は妻に対して、「Y子（娘）は、離婚してもいいじゃないか。お前（妻）と一緒に二人で暮らせばいいよ」とアドバイスをした。また死の前日には、同じ患者は妻に、「あんた、俺がいなくなっても大丈夫だわ」と言った。妻は笑顔でこれを聞いていたという。

大腸癌の49歳の女性は息子に手紙を残し、その中には、「死んでも（あなたを）見ているから、大丈夫」と書かれてあった。今でも息子にとってこの手紙は、生きていく勇気となっている。

### 5) 【心身の苦痛】

患者達は身をよじる激しい痛みや不安を、様々なことばで家族に訴えていた。

子宮と卵巣癌の67歳の女性は、疼痛や倦怠感などの苦痛が強く、身の置き所のなさを訴え、死の2週間前からは、「ベッドを上げて」、「ベッドを下げて」と夫に訴え続けた。夫は患者の要求通りにベッドの背もたれを調節した。また、同じ患者は死の10日前には、「私の体がだんだんだんだん壊れていく」と夫に訴えた。夫は慰めのことばを言っても意味がないと思い、沈黙した。

腎腫瘍で膀胱癌の53歳の男性は、死の1ヶ月前に疼痛と倦怠感に苦しんでいたが、心細さもあって、「泊まって、泊まって」と妻に病院に泊まってほしいとせがんだ。妻はその日から病院に泊まり込んだ。また、死の1週間程前から、痛みや倦怠感のために体のやり場がなく、患者は妻に、「寝かしてえ」、「起こしてえ」、「横になりたい」とはっきりなしに訴えた。妻は患者の側にずっと付き添い、体の向きを変えた。

### 6) 【あきらめ】

死が近いことを感じている患者達は、家族に対して「あきらめ」という形で死を受容してほしいと訴えてもいた。

大腸癌の49歳の女性には疼痛があったが、息子

には苦痛を訴えたことがなかった。しかし、死の2週間前に、息子に対して静かに、「私、死にたい」と言った。これは一日でも長く生きてほしい願う息子に、患者なりにあきらめてほしいという意味を伝えたものだったが、彼は患者のこぼれにショックを受け、「もっと生きていてほしい」と患者に言い、このこぼれを受容することができなかった。

胃癌の87歳の男性は、病名告知を受けていなかったが、患者自身は死が近いことを感じ、死の1週間前に娘に対して、「頑張れ頑張れ言うてもう、おらにも限界があるわ」と言った。しかしこのケースも、娘は患者のこぼれに困惑し、何も言えなかったという。

#### 7) 【怒り】

患者達はどこにもはけ口のない怒りを配偶者にぶつける場合もある。

大腸癌の60歳の男性は死の1ヶ月前、妻に対して、「俺はこういう病気になったのに、お前はしゃあしゃあとしている」と言った。妻は懸命に患者の看病をしていたため、このこぼれには怒りを感じたが、何も言わずに我慢した。

#### 8) 【死後の世界】

死後の世界について口にする人もいた。

胃癌の87歳の男性は、死の2週間前、娘に対して、「おら悪人やから、地獄に行かんらんわ」と言った。娘は「えー、そんなことないよ」と笑い、そのこぼれの意味を特に尋ねなかった。

#### 9) 【自然との触れ合い】

自然の美しさを語る人もいた。

大腸癌の60歳の男性は、癌を告知されてから「野鳥の会」に入会し、自然に親しむようになった。そのころから空を見上げるようになり、「今日の朝日きれいだったね」、「夕日きれいだったね」、「月きれいだったね」と妻と空の話をよくした。

### 考 察

以上の結果から、主として「臨死患者のこぼれ」のみに焦点を当てて考察を展開する。

#### 1. 看護師が聞いた「臨死患者のこぼれ」の特徴

看護師が聞いた「臨死患者のこぼれ」を分析したところ、本研究の範囲内で、一定の特徴があることがわかった。

#### 1) 患者は死が間近に迫っていることを表すこぼれをよく看護師に発している。

インタビュー結果を分析したところ、【間近に迫った死の意識】、【あきらめ】、【死の迎え方の希望】等から、看護師が聞いた臨死患者のこぼれには、死が間近であることを意識した患者が、その気持ちをストレートに表すこぼれが多く含まれていた。

【間近に迫った死の意識】では、悪性リンパ腫の男性は、看護師に、「もう俺、死んでしまうんか」と問いかけ、57歳の男性は、「もう自分は月単位ではなくて、日単位なんだよな」とつぶやいた。【あきらめ】では、72歳の男性は、死の1週間前に、看護師に、「今度はもうだめだ」と言っている。【死の迎え方の希望】では、呼吸苦の強いある男性は、念願の妻との和解を実現した死の数日前に、「これで心残りはないから、眠らせてほしい」と、鎮静剤の投与を看護師に頼んだ。

家族にも死を示唆することばを患者は送っているが、看護師はいわば看取りの専門家であるから、患者は家族よりも率直に、死への思いを表現していたのではないかと考えられる。

#### 2) 人生を振り返ることばも放っている。

また、人生を振り返ることばも看護師達は聞いていた。そこから、死が間近に迫っている患者達が、【人生の振り返り】を行い、自分の人生を肯定的に捉えようとしている姿を見ることができた。

例えば、40代の男性は、昔は複雑な家族関係に悩んでいたが、死の1週間前には、「お袋を二人もって、俺は幸せ者だったんだ」と看護師に言って、自分が幸せだったことを確認していた。また、疼痛が強く、ベッド上での生活を余儀なくされていた患者は、教師をしていた頃の話を見聞に訴えて、自分の輝かしい時代を思い出していた。

これらの患者は40、50代と若い年齢の患者であった。人生の目的を十分に達成できていないまま死を迎えなければならない若い患者達が、その限られた人生の中に価値を見出ししていくことは特に重要であり、そうすることによって、患者は自分



の人生を受容し、死へ向かう準備を進めることができるのではないだろうか。そして時に、患者達がこうした振り返りのことばを看護師に聞かせるのは、患者の死が近いことを家族より看護師の方が冷静に受け止めて、耳を傾けてもらえるからであろう。

### 3) 直接家族に関わることばを看護師にも聞かせている。

【家族を遺す不安】，【家族関係への後悔】，【感謝】のことばは、患者の家族への思いを看護師に伝えることばであった。

#### ①【家族を遺す不安】を表すことば

82歳の女性患者は、「お父さんも娘も心配」と痴呆症の夫や、精神疾患のある娘を心配して、何度も看護師に打ち明け話をした。また、60歳の女性患者は、「誰かいい人（息子の再婚相手）いないかな」と息子の子供の面倒をみる人がいなくなることを心配していた。

これらから、臨死患者は自分の身を案じるだけでなく、家族の幸せを念頭に置いていることがわかる。こうしたことばは家族にも語っているが、看護師に直接語ることで患者が家族への不安を緩和したいという、強い欲求をもっていることがうかがえる。

#### ②【家族関係への後悔】を表すことば

中には自分の人生を振り返り、家族関係に心残りを見いだす患者もいた。いずれの患者も看護師に、家族関係の修復への仲介を、このことばによって希望していた。本研究の範囲内では、こうしたことばを向けるのは看護師に対してのみだった。やはりこのような事柄は、直接家族には言いがたいのだろう。

60代の男性は、「妻に会いたい。このままでは死ねない」と、こじれた夫婦関係を後悔していた。また、80歳の女性患者は、「自分が悪いことをしてきたから、娘から介護なんてしてもらえない。わかっているんだけど（和解したい）」と娘への後悔の気持ちを看護師に述べていた。

キャラナンらの臨死患者のことばの研究の中でも、死にゆく患者の和解の欲求が報告されている<sup>4)</sup>。後悔を残さずに死を迎えることは極めて重要であるため、インタビューした看護師達が実

践していたように、臨死患者に関わる看護師は、時には家族関係の修復への介入を行う必要もあるだろう。

#### ③家族への【感謝】を表すことば

ある男性は、「病いしてしみじみ感じる家族愛」と、看護師に自作の俳句を聞かせ、「家族のありがたさを実感した」と言った。もちろん、家族への【感謝】のことばは家族にも伝えている。しかし、看護師にも伝えることで、【感謝】の念を自分の中で強化したのであろう。

#### 4) 苦痛緩和を要求することばを向けている。

「こんなに痛いのなら、他の世界に行きたい」、「死にたくない、この痛みをとってほしい」等の【心身の苦痛】に関することばは家族にも向けられてはいる。これらのことばには、いらだちのような精神的な苦痛の要素も含まれていると思われるが、ここでは、専門家である医師や看護師に、専門的な技術をもって適切に薬物を使用し、疼痛を緩和してほしいと要求する意味合いも含まれていると考えられる。

#### 5) 看護師にも【感謝】を表すことばを述べている。

【感謝】の中には、家族だけではなく、看護師に対する【感謝】を表すことばがあった。82歳の女性患者は、看護師に、「いろいろお世話になってありがとうございます」と述べ、ある男性は、「ありがとうね。長い間世話になったね」と言った。これらのことばはいずれも、死がごく間近に迫った時のものであり、患者の看護師に対する【感謝】と別れのことばであると考えられる。

#### 6) 神仏や先祖への思いを語っている。

【死後の世界】，【墓参りへの希望】，【神への祈り】では、一般的に健康な頃にはあまり考えることのない、死後の世界や、先祖について口にする患者がみられた。

60代の男性は、「死んだら一体どこへ行くんだろう」とつぶやき、死後の世界について考えていた。また、80代の男性2人は、死の1週間程前に、興奮した様子で墓参りを強く希望した。キリスト教徒の女性患者は、「静かにそこにいけるように、みんなで祈ってほしい。看護婦さんにも祈ってほしい」と病室でのミサを希望した。

患者はこうしたこばを語ることによって看護師には、【墓参りへの希望】や【神への祈り】等の要求を直接ぶつけ、入院中という制限の中でも、そのための配慮を求めているように思われる。

## 2. 家族が聞いた「臨死患者のこば」の特徴

次に、家族が聞いた「臨死患者のこば」を分析したところ、看護師が聞いた「こば」と同様に、本研究の範囲内で、一定の特徴があることがわかった。

### 1) 家族を気遣う貴重なこばを患者は放つ。

家族が聞いた「こば」には、家族を気遣う貴重なこばが多いことがわかった。患者の家族に対する様々な思いを、家族は、【家族を遺す不安】、【家族への励まし】、【配偶者への愛】、【感謝】のこばとして受け取っていた。これらのこばは死別後も特別な記憶の中で、遺族を励まし続けている。

#### ①【家族を遺す不安】を表すこば

【家族を遺す不安】を表すこばは、患者は最も心配をしている当事者に直接伝えることをせず、患者が信頼できる当事者以外の家族や友人に心配な気持ちを伝え、自分に代わって力になってほしいと頼んでいた。

例えば、67歳の女性は、「私が死んだら（夫が）一人になるんで、それが心配で、死ぬにも死にきれない」と、夫を遺して死ぬ不安を息子の妻に伝えていた。80歳の女性は、「この子（娘）、兄弟おらんから、あんたさん兄弟になってくだはれ」と、娘を遺す不安を娘の友人に伝えていた。

患者は家族を動揺させないようにと気遣い、心配な気持ちを直接家族には伝えず、他の人に話すことで、いくらか不安を緩和しようとしていたと考えられる。

#### ②【家族への励まし】のこば

一方、【家族への励まし】のこばとして、60歳の男性は妻に、「あんた、俺がいなくても大丈夫だわ」等のこばを残していた。このケースでは、患者も妻も病名や病状を詳細に理解していた。患者は妻が自分の死を受容していることを認識できたため、妻に、自分の死を前提とした「励ましのこば」を送ることができたと考えられる。

### ③愛や感謝のこば

また、死を間近にした患者は、配偶者や子供に対して【配偶者への愛】や【感謝】の気持ちを送っていた。

65歳の男性は、死の数日前に妻に、「わがままな一生送らせてもらって、ありがとう」と、今までの自分の人生の反省と妻への感謝の気持ちを伝えた。この患者はいわゆる典型的な亭主関白で、夫婦喧嘩が絶えなかったそうである。したがって、このこばを聞いた妻は、今までの苦勞が報われたようで、生きていく勇気が湧いたと喜んでいて。また、60歳の男性は、死の1週間前に妻に、「モナリザの微笑ってあんたのためにあるんだ」と言った。妻は嬉しさのあまり、何度も同じセリフを患者にせがんだという。妻は、このこばに死別後どれだけ勇気づけられたことであろう。

一般的に、日本人の夫婦は、親密性についての要求をこばのレベルで交わすことが少ないと言われており<sup>9)</sup>、これらのケースも、いずれも感謝や愛のこばを交わすことが少ない夫婦であった。しかし、患者は死が近いことを感じる中で、配偶者のありがたさを実感し、悔いを残さないように、素直に自分の気持ちを伝えたのだと考えられる。これらの患者の一言は、遺された家族を強い悲嘆から救い、生きるエネルギーへと変えていく大きな力になるに違いない。

### 2) 苦しみを表すこばがリアルであり、患者の怒りも直接的に向けられる。

【心身の苦痛】を表すこばは看護師にも向けられているが、家族に向けられる時には、一層リアルで直接的で激しい響きがある。さらに家族にはこの苦しみの感情から、患者の【怒り】のこばも直接的に向けられる傾向がある。

67歳の女性は夫に、「ベッドを上げて」、「ベッドを下げて」等と訴えていたし、53歳の男性は妻に、「寝かせてえ」、「起こしてえ」、「横になりたい」とはっきりなしに訴えていた。いずれの配偶者も、患者の苦痛を和らげようと必死になってその要求に応えようとしていた。また、60歳の男性は、妻に、「俺はこういう病気になったのに、お前はしゃあしゃあとしている」と怒りの感情をぶつけていた。

臨死患者の苦しみや怒りの感情の発散は、いわば、カタルシス的な役割をもつと考えられる。患者が最も愛し信頼している配偶者が、その苦しみを共有してくれることを実感した時、患者は安心し、身体的な苦痛も和らいだのではないだろうか。

### 3) 【あきらめ】のことはそれとなく言う。

闘病生活に限界を感じた患者は家族に、「あきらめ」を意識させることはそれとなく送っていた。【あきらめ】のことは看護師にも向けられていたが、ここでは、そのことはもう少し間接的であると同時に、家族への願望も含んだことばとして浮き出てくる。

49歳の女性は、「もっと生きていてほしい」と言う息子に対して、「私、死にたい」と静かに言った。また、87歳の男性は娘に、「頑張れ頑張れ言うてもものう、おらにも限界があるわ」と弱音を吐いている。

このように、ここでの【あきらめ】のことは、患者が懸命に病気と闘った末に自分の限界を感じ、「あきらめ」という形で死の受容を表していることばであると同時に、励ます一方の家族にも、自分の死が近いことを認めて、覚悟をしてほしいという願いを込めたことばではないかと考えられる。

### 4) その他のことばについて

家族にも患者は【死後の世界】を示唆することばを語っているが、特にここでは、一つのことばのみの抽出であったために、これによって家族に対することばの特徴としては、特に明確化できなかった。しかし87歳の男性が、死の2週間前に語ったという、「おら悪人やから、地獄に行かんらんわ」ということばを深読みすれば、そこには家族に対する何らかのざんげの気持ちが表れているとみることも不可能ではないだろう。

さらに、【自然との触れ合い】に関することばも1人においてみられた。60代の男性は、死の1ヶ月程前から、妻に、「今日の朝日きれいだったね」、「夕日きれいだったね」、「月きれいだったね」と空の話をよくしていた。柏木は、「死が近いことを感じた時、人は近くの小さな自然の中に、元気な頃は感じなかった特別の輝きを感じるようである」と述べている<sup>6)</sup>。本調査では、自然に関することばは1例のみであり、特に「家族へのこと

ば」の特徴としては明確化できないが、臨死患者にとって自然は特別な意味をもつと言われていることから、看取る者はそれに注意を払う必要がある。

### 3. 今後の終末期看護への展望－「臨死患者のことば」をどのようにケアに生かしていくか

#### 1) 「臨死患者のことば」を看護師と家族が聞き逃さず、共有し合ってその意味を汲み取る努力が求められる。

これまでみてきたように、臨死患者の「ことば」には重要なメッセージが含まれていることがわかった。したがって、その「ことば」に注目していく必要があるのだが、現時点では、ことに医療スタッフからそれほど注目されているとはいえない。まず、この現状を改善していくことが、今後の臨死患者の看護を深めていくことにつながるものと考えられる。そのためには何よりも、患者達の放つことばへの看取る者の感受性を高めていくことが必要となる。臨死患者の心理に対する基礎知識をもつことはもとより、日常生活での様々な体験や、さらに、文学作品等を通して「ことば」の問題に敏感になることで、感受性を高めていかれるであろう。このようにして、臨死患者の放つことばが極めて重要であるとの認識を心の中に植え付けておくことが求められるのである。

一方で、その「ことば」の重要性を家族にも指導し、一言、一言を聞き漏らさずに記述しておくことの必要性も伝えなければならない。時として、患者は家族には、より率直に気持ちを述べる場合もあるからである。

そして、看護師と家族は聞いたことばの意味を汲み取っていくように努力をしなければならない。そのために両者はコミュニケーションを密にして、患者のことばを共有し、その意味する内容を共に考え合っていく努力が必要となる。

#### 2) 「臨死患者のことば」から、看護師と家族が協力して具体的な要求を満たすことが重要である。

共有し合った「ことば」から、何か具体的な要求を患者がしているとわかった時には、相互に協力して、倫理に反しない範囲で、その願いを最大限満たすことができるように努力をしていかなければ

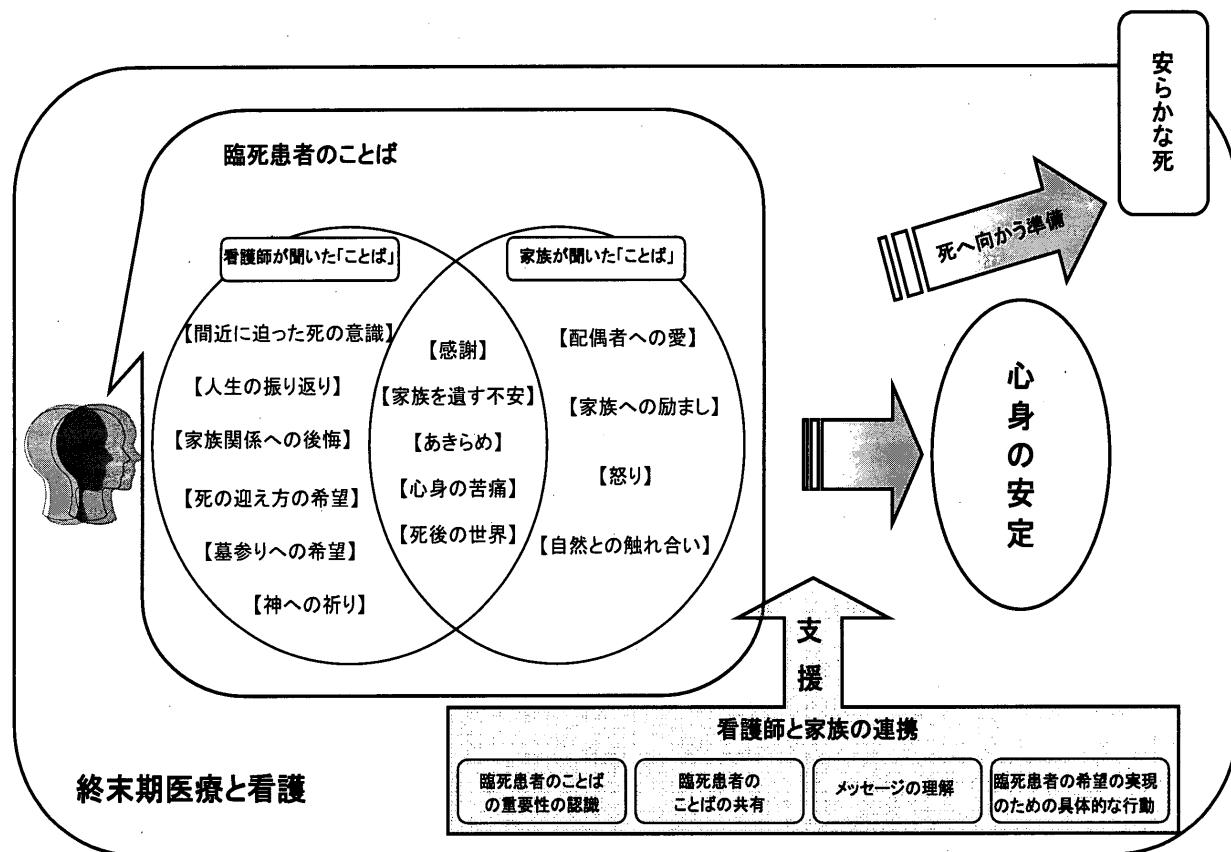
ればならない。その場合、臨死患者には残された時間が極めて少ないことから、早急な対応が必要となる。

キリスト教徒の女性患者が、最期の場面でミサを立ててほしいと希望した時、看護師はすぐに患者の希望を夫に伝え患者の希望は叶えられた。このように、看護師と家族が共に協力し患者の希望を叶えたなら、患者は安心して最期の時の準備を進めることができるし、家族はできる限りのことをしたという思いから、後悔が少なくなると考えられる。

以上、本論文で判明した内容をもとに「臨死患者のこぼ」をめぐる看護支援のあり方について図に示した（図参照）。看護師と家族が連携して臨死患者のこぼのメッセージを理解し、患者の最期の希望を叶えることが、患者の心身の安定や、安らかな死につながっていくことを図では表している。

## 結 論

1. 看護師が聞いた「臨死患者のこぼ」の内容は、【間近に迫った死の意識】【あきらめ】【人生の振り返り】【家族関係への後悔】【家族を遺す不安】【感謝】【心身の苦痛】【死の迎え方の希望】【死後の世界】【墓参りへの希望】【神への祈り】の11のカテゴリーに分類できた。看護師が聞いた「こぼ」には、【間近に迫った死の意識】等の自分の死が近いことを表すことばが多く含まれていた。【人生の振り返り】のこぼは本研究の結果では看護師のみが聞いており、そのこぼを語ることで、患者は自分の人生を肯定的に捉えようとしていた。【家族関係への後悔】【死の迎え方の希望】【墓参りへの希望】【神への祈り】はいずれも要望を表すことばであり、患者は何らかの介入を看護師に求めていた。
2. 家族が聞いた「臨死患者のこぼ」の内容は、【家族を遺す不安】【配偶者への愛】【感謝】【家族への励まし】【心身の苦痛】【あきらめ】



図「臨死患者のこぼ」をめぐる看護支援のあり方

【怒り】【死後の世界】【自然との触れ合い】の9のカテゴリーに分類できた。家族が聞いた「ことば」には、【家族を遺す不安】【家族への励まし】【配偶者への愛】【感謝】等の家族を気遣うことばが多くみられた。これらのことばは、患者の死後も遺族の心に深く刻み込まれていた。【心身の苦痛】【怒り】のことばでは、患者は家族には遠慮がないためか、苦しみや怒りの感情がより直接的に家族にぶつけていた。

3. 本研究により、「臨死患者のことば」には、重要なメッセージや要望が内包されていることがわかった。それを踏まえて、今後の終末期看護への提言をしたい。

1) まずは看護師が「臨死患者のことば」の重要性を深く認識することが求められる。そのためには、看護師は臨死患者の「ことば」への感受性を高める努力をしなければならない。

2) 看護師は家族へも患者の「ことば」に傾注する重要性を指導し、両者が患者のことばを共有し、その意味について共に考えていかなければならない。時として、患者は家族にはより率直に気持ちを述べるため、極めて重要なことばを遺す場合があるからである。

3) 臨死患者のことばに具体的な要望が含まれている場合は、看護師と家族は協力し、それが倫理に反しない限り、迅速に患者の要望の実現に向けて行動する必要がある。そうすることによって、患者は心残りなく死の準備を進めることができると考えられる。

以上、本論文で判明した内容を図に示した(図参照)。

(本論文は、平成14年度富山医科薬科大学大学院医学系研究科看護学専攻の修士論文を一部改変縮小して論述したものである。)

## 謝 辞

本研究に貴重な体験や思い出を話してくださいました看護師と遺族の皆様にご心より感謝申し上げます。また研究の実施にあたり、研究の場を快く提供してくださいました、富山県立中央病院看護部長の高堂喜美子様、富山医科薬科大学附属病院

看護部長の山口千鶴子様、看護師長の皆様に深謝いたします。

## 文 献

- 1) 長谷川浩, H. H. Flitter: ザ・ホスピス 日米比較によるターミナルケアの人間学. pp3-23, メヂカルフレンド社, 東京, 1993.
- 2) M. Callanan, P. Kelley: 死ぬ瞬間の言葉. pp9-208, 二見書房, 東京, 1995.
- 3) A. Lieblich, R. Tuval-Mashiach, T. Zilber: Narrative Reseach. pp112-140, SAGE Publications, Thousand Oaks, London, New Delhi, 1998.
- 4) M. Callanan, P. Kelley: 死ぬ瞬間の言葉. pp170-192, 二見書房, 東京, 1995.
- 5) 亀口憲治: 家族心理学特論. pp114-121, 放送大学教育振興会, 東京, 2002.
- 6) 柏木哲夫: 死にゆく患者の心に聴く. pp121-131, 中山書店, 東京, 2001.
- 7) Elisabeth Kubler-Ross: 死ぬ瞬間. 鈴木晶訳, 読売新聞社, 東京, 2002.
- 8) 澤田愛子: 末期医療からみたいのち. 朱鷺書房, 大阪, 2000.
- 9) M. B. Miles, A. M. Huberman: Qualitative Data Analysis. SAGE Publications, Thousand Oaks, London, New Delhi, 1994.
- 10) 林 智一: 人生の統合期の心理療法におけるライフレビュー. 心理臨床学研究17(4): 391-340, 1999.
- 11) 高木きよ子: 文学にみられる生と死. 大明堂, 東京, 1983.

## Words of dying patients -analyses of meaning and a consideration on supports to them-

Rieko WAKABAYASHI, and Aiko SAWADA

School of Nursing, Toyama Medical and Pharmaceutical University

### Abstract

In order to clarify and analyse words of dying patients whose remaining life is within a month, we interviewed nurses and their bereaved families.

As results of analyses based on the analysing method of narrative research, the words that nurses listened were classified 11 categories as follows: awareness to die soon, resignation, looking back upon their own lives, repentance about their family relations, uneasy feelings about leaving family, gratitude, physical and spiritual pain, desire on how to die, the world after death, request to visit ancestors' graves, and prayer to God.

The words that patients' families listened were classified into 9 categories as follows: uneasy feelings about leaving family, love for their spouses, gratitude, encouragement to family, physical and spiritual pain, resignation, anger, the world after death, and contact with nature.

From the results, it was clarified that words of dying patients include important messages or their wishes. Regarding supports to them, first, nurses must understand the importance of their words and they must lead their families to pay attention to their words. Then, it is also important that nurses and patients' families have their words in common and if their words include some requests, both try to grant those as much as possible.

### Key words

words of dying patients, important messages, analyses of meanings,  
categories, supports to grant patients' requests